

6. 黒毛和種繁殖農家における牛白血病清浄化への道 ～序～

豊後大野家畜保健衛生所¹⁾ 大分家畜保健衛生所²⁾

○藤田敦己¹⁾ 稲垣望¹⁾ 安達聡¹⁾ 廣瀬啓二¹⁾ 河野宣彦¹⁾ 病鑑 長岡健朗²⁾

【はじめに】

地方病型牛白血病は、現在、全国的に感染が拡大し、経済的損失の大きさから、本年4月には農水省によりまん延防止に向けた衛生対策ガイドラインが策定され、5月にはと畜場における共済制度の適用が開始される等、その対策が推進されている。そこで、清浄化に意欲のある管内肉用牛繁殖農家3戸の牛白血病ウイルス(BLV)の浸潤状況調査を行い、それぞれの飼養環境に即した清浄化への道を歩みはじめたので、その概要を報告する。

【農場概要】

A農場は繁殖雌牛73頭、舎飼。B農場は繁殖雌牛40頭、舎飼および放牧。C農場は繁殖雌牛59頭、舎飼および放牧。

【取組内容】

繁殖雌牛全頭のリアルタイムPCRによる血中BLV遺伝子検査及び受身赤血球凝集反応(PHA)による血清抗体検査を実施。導入牛および陰性牛はより感度の高いnested PCRでの遺伝子検査を実施。その結果に基づいて、A農場は代用初乳等を活用した経乳感染の防除対策(2012年から実施継続)、吸血昆虫対策や人為感染防除を実施。B農場は、陽性牛と陰性牛の牛房を分け間に防虫ネットの設置、放牧は分離。C農場は、牛舎、放牧ともに分離飼育。B及びC農場では保留牛及び導入牛は随時検査し後に群分けを実施。

【結果及び考察】

リアルタイムPCRによる陽性率はA農場が75.3%(55/73)、B農場が77.5%(31/40)、C農場が62.7%(37/59)。A農場は、2012年の抗体陽性率41.5%(34/82)から今回陽性率が上昇したことから、経乳感染の防除のみによる対策では不十分であったことを確認。少なくとも分離飼育が必要と考えられた。また、分離開始1ヶ月後の陰性牛群の遺伝子検査では、B農場では9頭中1頭に、C農場では22頭中3頭に陽転が認められ、分離前1回の検査のみでは確実な感染牛の摘発が困難であることが示唆された。

【まとめ】

飼育環境により対策に限界はあるが、陰性牛群は今後も定期的に検査を行うとともに、陽性牛の優先的な淘汰や陰性牛の保留推進等により農場の清浄性向上を継続的に推進する。今回対策を開始した3農場はBLV陽性率が高く長期的な取組が想定されるが、いずれも若い後継者が長時間を要しても農場の清浄化を達成する意思があるために取組が実現した。今後も生産者と関係機関の連携を密にし、お互いが励まし支え合い、清浄化が達成できる日まで根気強く取組を続けていきたい。